

「六の宮の姫君」説話

——物語の終わりをめぐって——

「六の宮の姫君」第五節。まず原話（『今昔物語集』巻十九「六宮姫君出家語第五」）、次に小説と引用しておく。

八家ニ行タルニ、此ノ人ニ不值スシテハ世ニ可有クモ不思議ケレバ、只足手ノ向タラム方ニ行テ尋ネムト思テ、物語ノ様ニテ、裏履ヲ着ハキ、笠ヲ着テ所ミヲ尋ネ行クト云ヘバ、更ニ不尋得ザリケレバ、「若、西ノ京ノ辺ニヤ有ラム」ト思テ、二条ヨリ西様ニ、大垣ニ副テ行ク程ニ、申西ノ時許ニ搔暗ガリテ、腹痛ク降レバ、「朱雀門ノ前ノ西ノ曲殿ニ立隠レム」ト思テ立寄タレバ、連子ノ内ニ人ノ氣ハヒ有リ。和ヲ寄テ臨ケバ庭ノ極テ穢ナルヲ曳キ廻シテ人ニ人居タリ。一人ハ年老タル尼也、一人ハ若キ女ノ極テ瘦セ枯テ色青ミ影ノ様ナル、賤シキ様ナル破ヲ敷テ其レニ臥シタリ。牛ノ衣ノ様ナル布衣ヲ着テ、破タル庭ヲ響ニ曳懸テ、手枕シテ臥シタリ。和纒カニ此ク賤シ乍ラ□ナル者ヨ、ト見ユ。恠シク思レバ、近ク寄テ吉ク臨ケバ、此ノ失ヒタル人ニ見成シツ目モ暗レ心モ騒テ守リ居タル程ニ、此ノ人ノ極テ□ニ勞タ氣ナル音ヲ以テ此ク云フ、

佐々木 雅 發

タマクラノスキマヲ風モサムカリキ、ミハナラハジノモノニザリケル

ト。此ク云ヲ聞クニ、現ニ其ニテ有レバ、奇異ク思ヒ乍ラ、懸タル庭ヲ搔キ開テ、「此ハ何ニ、此クテハ御マシケルヲ、尋ネ奉ルトテ此ク迷ヒ行キツルニ」ト云テ、寄テ抱ケバ、女貞ヲ見合セテ「早ウ遠ク行ニシ人也ケリ」ト思フニ、難堪クヤ有ケム、即チ絶入テ失ニケリ。男暫バ「生ヤ返ル」ト抱キタリケレドモ、ヤガテ水エ煙ニケレバ、此ク見成シテ、其レヨリ家ニモ不行シテ、愛宕護ノ山ニ行テ、誓ヲ切テ法師ニ成ニケリ。

道心養ニケレバ、貴ク行ヒテゾ有ケル。出家ハ、于今始メ機縁有ル事也。

此ノ事ハ委シク語り不伝ヘズト云ドモ、万葉集ニトモ云フ文ニ被注タレバ此ク語り伝ヘタルトヤ。』

八男は翌日から姫君を探しに、洛中を方々歩きまはつた。が、何処へどうしたのか、容易に行き方はわからなかつた。

すると何日か後の夕ぐれ、男はむら雨を避ける為に、朱雀門の

前にある、西の曲殿の軒下に立つた。其処にはまだ男の外にも、物乞ひらしい法師が一人、やはり雨止みを待ちわびてゐた。雨は丹塗りの門の空に、寂しい音を立て続けた。男は法師を尻目にしながら、苛立たしい思ひを紛らせたさに、あちこち石畳を歩いてゐた。その内にふと男の耳は、薄暗い窓の櫺子の中に、人のゐるらしいけはいを捉へた。男は殆ど何の気なしに、ちらりと窓を覗いて見た。

窓の中には尼が一人、破れた簾をまとひながら、病人らしい女を介抱してゐた。女は夕ぐれの薄明りにも、無気味な程瘦せ枯れてゐるらしかった。しかしその姫君に違ひない事は、一目見ただけでも十分だった。男は声をかけようとした。が、浅ましい姫君の姿を見ると、なぜかその声が出せなかつた。姫君は男のゐるのも知らず、破れ簾の上に寝反りを打つと、苦しうにこんな歌を詠んだ。

「たまぐらのすきまの風もさむかりき、身はならはしのものにざりける。」

男はこの声を聞いた時、思はず姫君の名前を呼んだ。姫君はさすがに枕を起した。が、男を見るが早いか、何かかすかに叫んだきり、また簾の上に俯伏してしまつた。尼は、——あの忠実な乳母は、其処へ飛びこんだ男と一しよに、慌てて姫君を抱き起した。しかし抱き起した顔を見ると、乳母は勿論男さへも、一層慌てずにはゐられなかつた。

乳母はまるで気の狂つたやうに、乞食法師のもとへ走り寄つた。さうして、臨終の姫君の為に、何なりとも経を読んでくれと云つ

た。法師は乳母の望み通り、姫君の枕もとへ座を占めた。が、経文を誦誦する代りに、姫君へかう言葉かけた。

「往生は人手に出来るものではござらぬ。唯御自身愈らずに、阿弥陀仏の御名をお唱へなされ。」

姫君は男に抱かれた儘、細ぼそと仏名を唱へ出した。と思ふと悲しうに、ちつと門の天井を見つめた。

「あれ、あそこに火の燃える車が、……」

「そのやうな物にお恐れなさるな。御仏さへ念ずればよろしゅうござる。」

法師はやや声を励ました。すると姫君は少時の後、又夢うつつのやうに呟き出した。

「金色の蓮華が見えます。天蓋のやうに大きい蓮華が。……」

法師は何か云はうとした。が、今度はそれよりもさきに、姫君が切れ切れに口を開いた。

「蓮華はもう見えませぬ。跡には唯暗い中に、風ばかり吹いて居ります。」

「一心に仏名を御唱へなされ。なぜ一心に御唱へなさらぬ？」

法師は殆ど叱るやうに云つた。が、姫君は絶え入りさうに、同じ事を繰り返すばかりだった。

「何も、——何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、——冷たい風ばかり吹いて参ります。」

男や乳母は涙を呑みながら、口の内に弥陀を念じ続けた。法師も勿論合掌した儘、姫君の念仏を扶けてゐた。さう云ふ声の雨に交る中に、破れ簾を敷いた姫君は、だんだん死に顔に變つて行つ

た。》

明らかに前半部、原話と小説はびつたり重なっている。男が抱き寄せた時、姫君は男を見上げながら、^{（1）}「早ウ速ク行ニシ人也ケリ」ト思^{（2）}つたとある。その幽かな視線は、なにか遠い記憶を求めてさまようといった按配である。つまり姫君の中で男の存在は、それほどに遠く薄らいでいたといえるだろう。だから姫君は遠い昔へと記憶を遡らせながら、その間を流れた歳月の空しさに思い至つて、^{（3）}「難堪クヤ有」つたとでもいえようか。そしておそらくこれを承けて小説では、姫君は^{（4）}「男を見るが早い^{（5）}か、何かかすかに叫んだ^{（6）}きり、又筵の上に俯伏してしまつた」とある。姫君の心の中にどのような思いが走つたかはここでも定かでない。ただその時すでに姫君は、男の腕に抱かれつつ、深く暗い闇の中を辿つていたので。

ところで、後半部は原話と小説はまったく違う。だがこの部分は周知のように、『今昔物語集』巻十五「造悪業人、最後^{（7）}唱念^{（8）}佛^{（9）}往生^{（10）}語第四十七」を挿入したと考えるのが妥当だろう。口頃^{（11）}「罪ヲ造ル人、地獄ニ墮ツ」などということを^{（12）}「虚言^{（13）}」と嘲笑し悪業を重ねていた男が死に臨み、^{（14）}「火ノ車^{（15）}」が地獄から自分を迎えるのを見る。ある^{（16）}「智リ有ル僧^{（17）}」がその男に對かつて、すでに^{（18）}「火ノ車^{（19）}」を見て地獄を信じたのだから、^{（20）}「弥陀ノ念仏ヲ唱フレバ、必ズ、極楽ニ往生ス、ト云フ事ヲ信ゼヨ」と諭す。男が^{（21）}「南无阿弥陀仏」ト懺^{（22）}二^{（23）}千度唱^{（24）}えたとき僧が^{（25）}「火ノ車ハ、尚^{（26）}、見ユヤ否ヤ」と問うと、男は^{（27）}「火ノ車ハ忽ニ失ヌ。金色シタル大キナル蓮花一葉ナム、目ノ前ニ見ユル」と言つて死んでゆく。

〈其ノ時ニ、僧、涙ヲ流シテ、悲ビ貴ビテ返^{（28）}ニケリ。此レヲ見聞ク人、不貴ズト云フ事无シ。〉^{（29）}「此レヲ思フニ、仏ノ説キ給フ所ニ露モ不違ネバ、只、念仏ヲ可唱キ也トナム語リ伝ヘタルトヤ。——姫君の死に会い、男が即刻出家した次第、さらには〈出家ハ、于今始メ機縁有ル事也〉という評語の部分が削除され、それに代わつて、『今昔』の別の説話による姫君の死の克明な描出が用意されたわけなのである。その結果、たしかに原典（『今昔物語集』）と小説はまたしてもびつたりと重なつたといえるのだが、しかしここには少しくこだわつてみなければならない問題があるのだ。

姫君の死に臨んだ男の茫然自失。その絶望を契機とした男の決然たる出家への飛躍。——言うまでもなくこの結末には、原話（『六宮姫君夫出家語』）の主題が提示されていたはずである。この原話を含む『今昔物語集』巻十九の第一語以下第十八語までは〈出家譚〉が配列されており、おそらく『今昔』の筆者は、これらが〈出家譚〉として読まれ、共感されることを願つていたといつてよい。またそうしたことの背後に、仏教がまさに人間救済の最高の理法であつた時代と社会、いわば揺るぎない仏教的共同体が存在していたことは断るまでもない。

だが、この結末の敷衍に至るまで、原話の中心が姫君の零落、落魄の生涯であつたことも言うまでもない。しかし原話は姫君の死に際し、この姫君を九年間も置き去りにしていた男の唐突な悔悟と改悛、出家への跳躍によつて完結する。が、では肝腎の姫君は、その最期は、その魂は……？ しかし原話は結局姫君を沈黙の彼方に放置したまま、王法としての仏教的世界観を開陳して終

わるのである。

だが、まさしくそこに、この原話の矛盾と分裂が露呈されているといわなければならない。あれほど篤く姫君の孤独を見つめながら、原話は最後に来て姫君の孤独から男の決定へと目線を翻す。もとより男は、出家するほどに重く姫君の孤独を受け止め、それを内に抱え込んでしまったにちがいない。まただからこそその男の出家によって、男自身の孤独ばかりか姫君の孤独さえ救われたのだと結論して、原話はその円環を閉じたのだといえよう。が、それにしても、男の出家によって一切が、男自身の孤独ばかりか姫君の孤独もが癒されたと考えるには、近代の読者、仏教的共同体に生きていない近代の読者はあまりに懷疑的であるといわざるをえない。いや誰よりも芥川こそ懷疑的ではなかったか。おそらく彼はこの結末に、なにか突き放されたような空虚感、未完結感を覚えたにちがいない。そして、だからこそこの結末に代えて、芥川は他の説話を採用することにしたのだといえよう。

かくして「六の宮の姫君」第五節の後半部は、新しい原話をもとに、姫君の臨終の場面とその魂のゆくえを、あたうかぎり詳細に描き出す。が、依然として問題は残っているといわなければならない。と言うのは、小説において、その新しい原話もまた、著しい改変を加えられているからである。

無論、罪人が姫君に変わったことは不問に付してよいだろう。死を前にして、罪人も姫君もない。では何処が問題なのか。――まず姫君もまた「火の燃える車」に怯えなければならない。しか

し法師の言葉に励まされ、やがて姫君も「金色の蓮華」を見ることが出来た。が、原話の罪人はそこで死んでゆくことが出来たのに対し、姫君は「蓮華はもう見えませぬ」と呟かなければならない。しかも「跡には唯暗い中に、風ばかり吹いて居ります」と続けるのである。「何も、――何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、――冷たい風ばかり吹いて参ります」。そして姫君は、その暗黒の中に逝ったのである。

「火の燃える車」が「地獄」への転落を予兆しているとすれば、「金色の蓮華」は「極楽」への往生を約束していた。原話の罪人が「金色シタル大キナル蓮花一葉ナム、目ノ前ニ見ユル」と言いつつ死んでいった時、だから彼はたしかに「極楽」へ行くことが出来たはずである。またそれゆえに「僧、涙ヲ流シテ、悲ビ貴ビテ返ニケリ。此レヲ見聞ク人、不貴ズト云フ事无シ」。此レヲ思フニ、仏ノ説キ給フ所ニ露モ不違ネバ、只、念仏ヲ可唱キ也」という結語がもたらされたのである。が、そうだとすれば、その「金色の蓮華」すら消え失せて、ただ暗黒の中に一人佇むという姫君の身は、一体どこをさまよっているのであらうか。

さて、ここで想い起こされるのは『発心集』巻四の七話「或る女房、臨終に魔の変ずるを見る事」という説話の存在である。芥川がそれを参考にしたかどうかは不明だが、それでも「或る女房」は最後、暗黒の中に一人佇んでいたのである。以下その全文を引用してみよう。

「或る宮腹の女房、世を背けるありけり。病ひをうけて限りなりける時、善知識に、ある聖を呼びたりければ、念仏すすむる程に、

此の人、色まさをになりて、恐れたるけしきなり。あやしみて、「いかなる事の、目に見え給ふぞ」と問へば、「恐れげなる者ども、火の車を率て来るなり」と云ふ。聖の云ふやう、「阿弥陀仏の本願を強く念じて、名号をおこたらず唱へ給へ。五逆の人だに、善知識にあひて、念仏十度申しつれば、極楽に生る。況や、さほどの罪は、よも作り給はじ」と云ふ。即ち、此の教へによりて、声をあげて唱ふ。

しばしありて、其のけしきなほりて、悦べる様なり。聖、又これを問ふ。語つて云はく、「火の車は失せぬ。玉のかざりしたるめでたき車に、天女の多く乗りて、牽をして迎ひに來たり」と云ふ。聖の云はく、「それに乘らんとおぼしめすべからず。なほなほ、ただ阿弥陀仏を念じ奉りて、仏の迎ひに預からんとおぼせ」と教ふ。これによりて、なほ念仏す。

又、しばしありて云はく、「玉の車は失せて、墨染めの衣着たる僧の貴げなる、只ひとり來たりて、『今は、いざ給へ。行くべき末は道も知らぬ方なり。我そひてしるべせん』と云ふ」と語る。「ゆめゆめ、その僧に具せんとおぼすな。極楽へ参るには、しるべいらす。仏の悲願に乗りて、おのづから至る国なれば、念仏を申してひとり参らんとおぼせ」とすすむ。

とばかりありて、「ありつる僧も見えず、人もなし」と云ふ。聖の云はく、「その隙に、とく参らんと心を至して、つよくおぼして念仏し給へ」と教ふ。其の後、念仏五六十返ばかり申して、声のうちに息絶えにけり。

これも、魔のさまざまに形を變へて、たばかりけるにこそ。》

たしかにこの説話の女房と小説の姫君の最期は酷似しているといわざるをえない。この説話の聖は女房に、一切の「魔」を拒絶し、ただひたすらに念仏することを教える。いわば須臾の幻視にかける一切の自力を排除し、ただひたすら仏にすがり他力を待つことを教えるのである。だから女房が「ありつる僧も見えず、人もなし」と、一切の「魔」が消えて、自らが暗黙の中に一人たたずんでいることを告げた時も、聖は「その隙に、とく参らんと心を至して、つよくおぼして念仏し給へ」と、なおひたすら念仏することをのみ諭すのである。

小説はまったくこれに一致する。姫君が「金色の蓮華が見えます。天蓋のやうに大きい蓮華が、……」と言つた時、「法師は何か云はうとした」という。へが、今度はそれよりもさきに、姫君が切れ切れに口を開いた」とあり、法師が何を言おうとしたかは書かれていない。しかしおそらく法師はその時、なんであれ姫君が幻想にすがらんとすることを叱ろうとしたにちがいない（「極楽へ参るには、しるべいらす」）。そして姫君が「蓮華はもう見えませぬ。跡には唯暗い中に、風ばかり吹いて居ります」と言つた時、法師は「一心に仏名を御唱へなされ。なぜ一心に御唱へなさらぬ？」と、「殆ど叱るやうに云つた」という。まさしく姫君が暗黒の中に一人たたずんでいることを告げた時、法師は、だからこそ今、ただひたすらに念仏するように声を高めて姫君を励ましたのである（「つよくおぼして念仏し給へ」）。へが、姫君は絶え入りさうに、同じ事を繰り返すばかりだつた。「何も、——何も見えませぬ。暗い中に風ばかり——冷たい風ばかり吹いて参り

まする。〕。へ男や乳母は涙を吞みながら、口の内に弥陀を念じ続けた。法師も勿論合掌した儘、姫君の念仏を扶けてゐた。さう云ふ声の雨に交る中に、破れ簾を敷いた姫君は、だんだん死に顔に變つて行つた。——とは、このように姫君は、法師に扶けられながら、一心に念仏しつつ、やがて死んでいったわけなのである（其の後、念仏五六十返ばかり申して、声のうちに息絶えにけり）。

繰り返すまでもなく、『発心集』の説話の女房と小説の姫君の死の場面は酷似しているといわざるをえない。しかし今はそのこととは暫く措いて、こうして小説は、新たに拠つた原話（『造悪業人、取後、唱念佛往生語』）の思想的境位を一步超えたということが出来る。自らの思いをこらし幻視の中に極楽浄土を現出させながら死んでいったもの、しかもそれをまさしく浄土へ往生しえたものとして寿ぐ安易な信仰の位相を一步深めて、いわば自力によるはからいをすべて放下し、ただひたすらなる念仏によつてのみやがて浄土へと往生することを願う信仰（往生浄土の思想）のもつとも深奥の本質において、姫君の臨終とその魂のゆくえを、果てまで描いたといつてよいのだ。

が、にもかかわらずここにおいても、問題は依然残つてるといわなければならぬ。はたして姫君はこの時、『発心集』の説話の女房のように、本当に極楽へ往生していたのか——？

なるほど姫君は、男や乳母と同じように法師に扶けられながら、へ口の内に弥陀を念じ続けゝていたかもしれない。しかし彼女の心の眼には、もう「何も見」えない。ただ「暗い中に風ばかり、——冷たい風ばかり吹いてゝいるのを感じるだけである」というの

だ。そしてそれはまさしく彼女が、もう何年も見づけて来た昏黒の光景ではなかつたか。しかも彼女は、その昏黒の光景の中に、今も、いやこれからの前途にも、へ冷たい風ばかりが吹きすさんでいるのである。

たしかに彼女は「ちつと男を待ち続けてゐた」のだ。しかし彼女の願ひは終に叶えられず、だから彼女は空しく虚空を漂つていただけにすぎなかつたのである。それは一面に広がる昏黒の光景を見つめつづけることでもあつたといえよう。そして彼女は、そのいわば絶対の孤独感を、生のもつともたしかな感触とし、それを「へならはし」として、それ以外のなにものをも必要とせず（「わたしはもう何も入らぬ。生きようと死なうとも一つ事ぢや。……」）、その一種異様な無気力、無関心の中で、生きて来だし、死んでゆくしかない。そしてこの意味で彼女には、その昏黒の光景の無限に続く様が、しかもその中を、自分が永劫に辿りつづける姿が「見え」るばかりだつたのである。

だがそうだとすれば今でも姫君は、依然として生きていた時と同じように、闇の中を一人辿つてゐるわけだし、その姫君の魂のゆくえを果てまで描こうとした小説も、まだなお完結することが出来ないといわなければならぬ。原典にはない、小説独自の後日譚が、だから必須であつた所以なのだ。

さて第六節。

へそれから何日か後の月夜、姫君に念仏を勧めた法師は、やはり朱雀門の前の曲殿に、破れ衣の膝を抱えてゐた。すると其処へ侍

が一人、悠々と何か歌ひながら、月明りの大路を歩いて来た。侍は法師の姿を見ると、草履の足を止めたなり、さりげないやうに声をかけた。

「この頃この朱雀門のほとりに、女の泣き声がするさうではないか？」

法師は石畳に蹲まつたまま、たつた一言返事をした。

「お聞きなされ。」

侍はちよいと耳を澄ませた。が、かすかな虫の音のほかは、何一つ聞えるものもなかった。あたりには唯松の匂が、夜気に漂つてゐるだけだった。侍は口を動かさうとした。しかしまだ何も云はない内に、突然何処からか女の声が、細そぼそと敷きを送つて来た。

侍は太刀に手をかけた。が、声は曲殿の空に、一しきり長い尾を引いた後、だんだん又何処かへ消えて行つた。

「御仏を念じておやりなされ。——」

法師は月光に顔を拾げた。

「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」

しかし侍は返事もせず、法師の顔を覗きこんだ。と思ふと驚いたやうに、その前へいきなり両手をついた。

「内記の上人ではございませんか？ どうして又このやうな所に——」

在俗の名は慶滋の保胤、世に内記の上人と云ふのは、空也上人の弟子の中にも、やん事ない高德の沙門だった。》

明らかに姫君は、いまだ極楽には至り着いていない。朱雀門の前の曲殿の空に長く漂う姫君の鬼哭——。そしてその姫君の鬼哭を、誰よりも早く聞いたもの、また誰よりも間近に、痛切に聞いているものこそ、姫君に念仏を勧めた法師であつたといえよう。

「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる」と法師は言う。姫君が生きていた時とまったく同じように、虚空を一人ただよっているとするれば、たしかに彼女は極楽ばかりか地獄をも知らずに、とはつまり、この現世、この穢土しか知らずに、だから永劫に「無明の闇」にとどまりつづければならぬ「腑甲斐ない女」でしかない。法師は言うのだ。

だが、おそらくその言葉は、誰よりも法師自身に向けられていたのではない。自らの信仰（信心）をかけて説いた念仏。しかしその念仏は一人の女をもまったく救うことが出来なかったのである。とすればその信仰（信心）はまったく無力ではないのか。しかも彼は依然として「御仏を念じておやりなされ」とその無力な念仏に自他を委ねるしかない。おそらく彼は他の誰よりも、自らの身の「腑甲斐ない」さを託たなければならなかったにちがいない。そしてまさしくここに、本願他力の思想の最奥のアポリア（⁹）が、試験があつたのである。

だがそれにしても、原話の未完結であつたことを厭い、わざわざ善知識を登場させて、姫君の迷える魂を果てまで導くように意図しながら、しかし依然その魂の迷いつづける様を如何んともしえぬとすれば、小説はここに至つても、なお完結することが不可能であつたといわなければならない。男が出家の彼方に消え去る

結末を、かならずしも男（そして姫君）の救いを意味してはいないとして避けたにしても、その代わり、夙に出家したはずの法師が依然として途方に暮れざるをえない姿を描いたことは、滑稽にも悲惨な矛盾といつてよいのだ。

無論、小説はこの「乞食法師」がへやん事ない高德の沙門（内記の上人）であつたという種明かしで終わる。へ木に竹をついだ感じ（10）などと評判が悪いが、なににせよ作品は終わらなければならぬからである。

さて、『今昔』の「六宮姫君夫出家語」の末尾には、この説話が『万葉集』より出ている旨の注記があつた。知られているように、それは『万葉集』巻十六の次の箇所である。（11）

3811 夫の君に恋ふる歌一首 短歌を并せたり
さ丹つらふ 君が御言と 玉様の 使も来ねば 思ひ病む

わが身ひとりそ ちはやぶる 神にもな負せ 卜部坐せ 龜
もな焼きそ 恋ひしに 痛きわが身を いちしろく 身に
染み透り 村肝の 心砕けて 死なむ命 急になりぬ 今更
に 君か吾を喚ぶ たらちねの 母の命が 百足らず 八十
の 衝に 夕占にも 卜にもそ問ふ 死ぬべきわがゆゑ

反歌

卜部をも八十の衝を占問へど君をあひ見むたどき知らずも
或本の反歌に曰はく

わが命は 惜しくもあらず さ丹つらふ 君に依りてそ長く
欲りする

右は伝へて云はく、ある時に娘子ありき。姓は車持氏なり。其の夫久しく年序を逕て往来を作さず。時に娘子、係恋に心を傷ましめ、痼疾に沈み臥り、瘦羸日に異にして、忽に泉路に臨みき。ここに使を遣して其の夫の君を喚び来れり。而乃歎歎流涕して、この歌を口號み、登時逝歿りきといへり。

すでにここには、長い歲月男をただ空しく待ち暮らす女の哀しい姿が反映している。

ところで、これもよく知られているように、「六宮姫君夫出家語」は『古本説話集』第二十八話「曲殿の姫君の事」と、冒頭と末尾に少々の相違がある他は、ほとんど同文同一の説話である。いま冒頭はしばらく問わず、『古本』の末尾を見ると、そこには『今昔』の「万葉集」云々に代わつて、へこのことは、詳しくからねど、古今に書かれたり」とある。（12）

一方、この説話にある姫君が死の直前に口ずさんだへ手枕の……の歌は、『拾遺和歌集』巻十四に「詠人しらす」として六首並んでいる中の一首という。その六首は、

へ思ふとていとこそ人になれざらめしかならひてぞ見ぬは恋しき
手枕の隙間の風も寒かりき身はならはしの物にぞ有ける
吹風に雲のはたてはとゞむともいかゞ頼まむ人の心は
若草にとゞめもあへぬ駒よりもなつつけわびぬる人の心か
逢ふことのかた飼ひしたる陸奥のこまほしくのみ思ほゆる哉

陸奥の安達原の白真弓心こはくも見ゆる君かな

であるが、国東文麿氏は、これらの恋歌の内容と第五、第六首に

『陸奥』が見えることから、『曲殿姫君（六宮姫君）』の語に似通うところの物語が『拾遺集』以前にあり、この六首はその中に含まれていたものを、順次に抜き出して並べたものではないか」として、へそだとする、「たまぐらの……」は二首目におかれてい
ることで、筋の上から、この『古本』『今昔』の語と同じであるとは思われないが、『古本』の語の作者はこの物語の内容をおぼ
ろげながら知っており、その所収話が一括されて『拾遺集』に入
れられていることも知っていたであろう。その中の最も印象的な
「たまぐらの……」の歌を記憶にとどめていて、それを末尾に用
いた物語を新しく書きあげた、それが『古本』の語といえるので
はなからうか。書きあげたあと、この歌の他の五首とともに『古
今集』にあると思ひ違いして、「このことは、くはしからねど古
今にかゝれたり」と記したのではないかと推定している。国東
氏の推定通りとして、やはりここにも、長い歲月男をただ徒に待
ち暮らす女の哀れな姿が投影しているのだ。

ただ、女が死に臨みながらも、男に再会しえた（感動）によつて完結する『万葉集』の語に比べ、女がただ空しく男を待ち暮らし、そのまま中断されたように終わる『拾遺集』の六首の（背後に予想される）話の方が、その人生の甲斐なさにおいて、『曲殿姫君（六宮姫君）』の原話にふさわしいといえるだろう。また、だからこそ『古本』『今昔』の筆者は、そのなんの保証もなく赤裸裸となつて生きる女、そのいわば存在それ自体が満える絶対的な孤独において死んでゆく女の魂を、仏教的摂理によつて救済しつつ、その（物語）を完結させようとしていたわけだといえよう。

ただ彼等に、どれほどの成算があつたのか。女は姫君の死を見とつた男の出家——。しかしそれは、男がまたしても女は姫君を置き去りにしていっただけではないのか。依然女は姫君の魂は、まるで抛り出されたごとく、闇の中にさまようばかり。そしておそらくこの時、『古本』『今昔』の筆者は、自らの物語が終に女は姫君の魂のゆくえに関与しえぬということに、しかもなおその物語を完結させなければならぬということに気づいていたし、さらにいえばそのことによつて物語の無力と限界に、もつといえ
ば物語の欺瞞に逢着していたのだ。

そして、おそらくこの物語の無力と限界、欺瞞に、芥川はだれよりも意識的であつたにちがいない。人間の魂のゆくえを果てまで語らんとして（言葉）を尽くし、しかし所詮どう終わらすことも出来ずに（言葉）を継ぎながら、結局うやむやに反復を重ねてゆくしかない物語の無力と限界、欺瞞ということに——。

だから小説は、あたうかぎり忠実に、原典の無力と限界、欺瞞をなぞつて来た。しかもそればかりではない。この現世、この穢土の一切の価値を拒否して出家したはずの（乞食法師）が、実は（やん事ない高德の沙門）（内記の上人）として、侍から土下座の礼を受ける、とはつまり、この現世、この穢土の価値の中に再び引きずり戻され、だからまたしても無明の闇にさまよわなければならぬという小説の結末も、要するに終わりあるようで終わりになく続く文学の宿命に、あたうかぎり忠実であろうとした結果なのだといつてよい。

ただし、ここには決して芥川の、絶望があつたわけではな

いだろう。その終わらない反復が文学の宿命であるとすれば、おそらく芥川は、むしろ進んでその文学の宿命に従ったのであり、だからそのことは、むしろひとつの希望であつたにちがいないといえよう。

(1) 大正十一年八月の「表現」に発表され、のち第六短篇集「春服」の巻頭に掲載された。なお小論は「六の宮の姫君」説話―物語の反復―(『文学年誌』第十集、平成二年十月発行予定)を承けるものである。御併読いただければ幸いである。

(2) 『今昔』の引用は以下すべて、岩波書店『日本古典文学大系』第二十四、二十五巻『今昔物語集』三、四による。

(3) 海老井英次氏は「六の宮の姫君」の自立性(『語文研究』昭和四十二年十月、のち『芥川龍之介論攷』桜楓社、昭和六十三年二月、に所収)の中で、(原典には、長い間別れていた夫と再会した余りの感動に「堪へ難くやありけむ、即ち絶え入りて失せにけり」と、姫君の死が、まったく(剎那の感動)的に語られている)と言っているが、正確な解釈とは言いがたい。

(4) 志村有弘「六の宮の姫君」論―芥川と菊池―(『近代作家と古典』笠間書院、昭和五十二年四月、所収)参照。

(5) 引用は新潮社(『日本古典集成』)『方丈記 発心集』による。

(6) このことに関し、注(1)の拙論で触れた。

(7) 同右。

(8) 従来、姫君の歩む闇を(中有の闇)とする論が多い。おそらく「藪の中」からの安直な借用だろうが、(中有)とは本来、輪廻の「期間―死んでまた生まれかわるまでの中間の状態(中陰)―」を指すので、やがて行き着く先はある。が、姫君の場合、永劫に行き着

く先はないのだ。その意味で煩惱と迷いの根源としての(無明)、その永劫に続く(闇)としての(無明の闇)こそ、ふさわしいと言えよう。

(9) 自力を一切放下すべく、多念義から一念義、さらに無念義へと動揺、彷徨しつつ、しかもなお無言の仏を前にして、(念仏はまことに浄土にむまるゝたねにてやはんべらん。また地獄におつべき業にてやはんべらん。惣じてもて存知せざるなり)(『教異抄』)と言ひ、(このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんと面々の御はからひなり)(同上)と言うしかなかった親鸞の、絶対他力の信仰の最終のアポリアなのだ。

(10) 長野誓一「古典と近代作家―芥川龍之介―」(有朋堂、昭和四十二年四月)。

(11) 引用は岩波書店『日本古典文学大系』第七巻「萬葉集」四による。

(12) 引用は朝日新聞社(『日本古典全書』)「古本説話集」による。

(13) この歌の解釈について、篠崎美生子「六の宮の姫君―その自立性―」(『繡』第二号、平成二年三月)参照。

(14) 引用は岩波書店『新日本古典文学大系』第七巻「拾遺和歌集」による。

(15) 国東文麿「今昔物語集作者考」(武蔵野書院、昭和六十年十二月)。

(16) 注(6)に同じ。

(17) 下西善三郎「曲殿の姫君」と「六の宮の姫君」―『今昔』と芥川―(『古典の新生と変容』明治書院、昭和五十九年十一月)参照。なお海老井氏は前出の論で、この結末に(近代の短篇小説としての形式的充足)を見ているが、その(近代の短篇小説としての形式的充足)とはどういうことかが、この場合問題となっているのである。

(18) 注(6)に同じ。